

地域とのかかわりの中から一般性の抽出 を目指した授業づくり

荒井眞一

はじめに

実践報告に先立って、前田先生より総合学習や生活科の授業づくりにおけるアプローチの方法やと授業づくりの成果の検討という、本分科会における継続的な研究課題がしめされた。引き続き前田先生からは、これまでの蓄積の実践史的な位置づけと、子どもによってつけられた力の内実についての考察の重要性が述べられた。

『総合』の授業づくりにおけるアプローチとその成果の検討」に対して求められる事柄は、「教えたいことと学びたいことの統一」「目標設定における知識・技能・情意の統一」「子ども

もにどのような力が付いたかということに対しての検討」の三点である。また、『生活科』の授業づくりにおけるアプローチとその成果の検討」に対して求められる事柄は、「体験によって学ばれたことの、子どもの具体的な学習成果からの検証」である。

以上のような継続的な課題設定の下で目指すべき実践の方向性は、社会をより深く見つめる目を養っていけるような学びの創造である。本分科会では、生産や労働における人々のありようについて具体的にとらえるような実践の方向性を視野に入れつつも、多様な実践から成果を吸収することをめざしている。

一 実践報告

1 交通研究会から交通情報同好会へ発展して

北海道白樺高等養護学校 亀井 清隆

亀井報告は交通を通して様々な活動を自主的に行わせ、他者と関わる力をつけさせることを狙いとし、その狙いを達成した実践であった。

報告者自身が鉄道に対して強い思い入れを持つことが、実践における大なる原動力となっている。交通という強い教材が、教師自身の深い造詣によって支えられている。日常的な体験と学びの懸け橋となりうる実践との評価が参加者一同に共通した認識とであり、さらなる報告が求められる。



2 土の学習

夕張市立ゆうばり小学校 齋藤 秀昭

齋藤報告は、夕張地域で1970年代から長く位置づけられてきた総合学習の一翼を担うものである。齋藤報告もまた、このような系譜に位置付けられうる実践報告であったように思われる。低学年では生活科、高学年では総合という大きな流れの中で、土と作物の関連を知ることによって環境と生活の密接なつながりについての理解を図ることが目標とされていた。

参加学生らとの議論の中で、土に対する抵抗が話題となった。家庭状況に左右される点が大きいが、実践を通して正しい理解に達した子どもたちの多くは土に対する抵抗が明らかに小さい

ことが指摘された。

3 裏のはたけで…

江差町立南が丘小学校 渡邊 洋一

渡邊報告は、子どもたちが自分の体を目いっぱい動かし自然に働きかけつつ、人と関わらせることを目標とした実践であった。

土を作るという大きな役割を持つ“ミミズ隊長”の意味づけを子どもたちは、自らの発見を通して学んだ。先の齋藤報告の成果とも相まって、土や昆虫などに対し子どもたちが正しい認識を持つことでそれらに対する接し方に影響を与えうる継続的に議論された。

4 オタマジャクシはカエルの子

中頓別町立中頓別小学校 山本 民

山本報告は、卒業した全6年生が置いて行ったカエルの卵の観察を通して、科学的な観察眼を養うことを目指したものであった。



報告者の担当する子どもたちの多くは、親による刷り込みからか

カエルやオタマジャクシを気持ち悪いものと認識している。このような子どもたちに丁寧な観察やスケッチとい

った基本的な活動を行わせることで、子どもたちが自分自身でカエルに対する意識を育むことを狙いとしました。

5 ビーグル号に乗った子どもダーウィンたち く学びの物語

江差町立南が丘小学校 中山 晴生

中山報告は、学級づくりの中心を生
活科におきつつ、子どもの学びと学習
課題との接点を実践から探ったもので
あった。子どもたちは自然観察に対す
る綴り方実践を通して、生き物の姿を
知りながら友達をかかわっていった。

長年にわたり実践報告を行ってきた



中山に見られるように、松山地域には「ふるさと学習」の積み重ねの歴史がある。前半に報告を行った渡邊もまた同様である。

6 「はてな・ふふん・ふふん」の22名の楽しさを感じよう

宗谷教職員組合 内藤 修司

内藤報告は、小学校2年生と過ごした1年間の学級通信の中から、生活科の学習を進めるうえで大切にしたいと考える視点を考察したものである。題名にある「はてな・ふふん・ふふん」とは、昨年まで世話人を務めていた蔦保収氏から報告者が学んだ教育実践におけるキーワードである。

昨今教育現場における縛りは多方面にわたる。このような中で、小規模校での実践から得られるものは大きいとのことであった。

7 北方領土学習の実践事例から

中標津町立中標津東小学校 近藤 啓之

近藤報告は、北方領土という大きなテーマに対して正面から取り組んだ実践の経過について述べたものであった。

北方領土の学習を通して考えうる問題は、平和とは、国家とは、人の暮らしとはという大きな問題ばかりである。これらの

問題に対して子どもたちが一つずつコツコツと考えを進めることで、北海道や日本に対する理解を少しずつ養ってもらったことが報告者のねらいであった。参加者からは今後の継続的な報告が強く求められた。



8 「百世の安堵を図る」ための防災教育の課題

「1854年安政南海地震、2000年有珠山噴火、2011年釜石の教訓を中心に」

室蘭工業大学 若菜 博

若菜報告は、「釜石の奇跡」をとおして、「哀しい知恵」とさされてきた「津波でんでんこ（津波の折にはバラバラになっても逃げなさいという意味）」に新しい意味が付加されたことを明らかにするものであった。

報告者によれば、正確な知識を持つことが、緊急時においても主体的な行動を惹起するものとなる。ここに防災教育の持つ大きな意味がある。

一一 総括

昨年度に引き続き、今年度参加者数も二桁となった。北海道文科大学生の参加も見られ、分科会における質疑応答にも活気がみなぎっていた。

昨年度から継続して参加された方も複数おり、昨年度の議論の経過を踏まえた有益な議論が交わされた。昨年度から継続して参加された方も複数おり、昨年度の議論の経過を踏まえた有益な議論が交わされた。若手教員による報告と中堅・ベテラン教員の報告がバランス良く配置され、見る側にもとても興味深い報告が相次いだ。